

註 癩(らい) 病：ハンセン病の旧称。その外見上の特徴や穢れ思想から差別や偏見の対象となり、患者は療養所に強制的に隔離された。現在では治療可能な病気であり、一九九六年にらい予防法は廃止された。しかし、一部では未だに偏見が

あり、二〇〇三年十一月に療養所入所者が黒川温泉のホテルで宿泊拒否された事件は記憶に新しい。本稿では、当時の時代背景を考慮して癩病と記することを許されたい。

“現場”の声を聴くこと 実践を物語ること

矢萩 恭子

『学びとケアで育つ 愛育養護学校の子ども・

教師・親』(二〇〇五、津守眞 岩崎禎子ほか著、

小学館)は一つの教育(保育)現場の日々の営み

を一冊の本にしたいという監修者佐藤学氏の願い

から誕生した。書き手は教職員、実習生、旧職

員、卒業生の保護者などこの学校にかかわる三十

名近い人々である。

実はかつて筆者も学生時代から数年間を愛育の保育の場で過ごさせてもらったのであるが、養護学校となってから今年で五十周年を迎えるというこの学校で行われている教育、と言うより子どもたちと保育者によって織り成されるここでの生活を他の人のように伝えたらよいのか語る言葉を探し得ないできたところがある。いわゆる「現場」で人と人とのかかわりのなかで起きていることや保育実践は、理論や技術の集大成としての言葉でクリアに言語化され、説明できる対象となることを拒む傾向がある。そこを本書は親も含めた複数の保育者がそれぞれ自分の言葉で、恐らく佐藤氏から「サクセス・ストーリー」としての記録ではなく、悩みや戸惑いや挫折を含むリアルなストーリーとして日々の経験を記述すること」という要望が出されるまでもなく、子どもと「私」と

の独自の物語としてありのままに書き、重ねるように連続して並べることによって表現している。

つまり、表現されているのは、同時進行的に或いは反省的に語られる子どもや子どもとかわる保育者自身の姿、双方の間に生まれる雰囲気や感情やつながり、迷いやためらいや辛さ、そしてそれらの変容する過程。あるいは子どもを生き生きと生かす環境やアートとして感じ取られる子どもたちの動きや活動、限りある命の灯をともし子どもとの日々、などである。

別の側面からは、養護学校の前身である愛育研究所の特別保育室の頃からかわってこられた津守眞理事長が展開する保育論、岩崎校長によるこの学校の基本、時間や空間、教材・教具の使い方、そしてカリキュラムなど学校運営に関する内容が語られている。

表題中の「学びとケア」の意味は本文に譲ると

して、学校という場で生きられる子どもと保育者との間に起こっていることについて保育者たちの語りに耳を傾けたとき、筆者には、その昔自分もそばで一緒に動いていたある保育者の寡黙なまでの姿の記憶と、本書での生々しい語りの表現に現われた当時の姿とのギャップが、真剣に子どもとかわかることについて圧倒的なりアリティをもつて迫ってきた。そして、先の発達心理学会のシンポジウムでのある研究者の報告が思い出されたのである。

それは、語る主体の身体が、言葉にすることを拒むような過去の強烈な体験を、言葉としては語り得ないにも拘わらず、映像に映るその人の動作を通してその抵抗をはっきりと表現している（彼は「身体が語らない言葉」と言っていたが）ものであった。人が過去の体験を語り出すときというのはどんなときか。そして

語ることによって現在はどうのように形作られ、子どもとの関係はどんな意味をもって立ち現われるのか。そんなことを考えた。

そのシンポジウムは、一九九〇年代から注目され始めたアプローチとされる現場（フィールド）心理学や質的研究に関するシンポジウムであった。質的研究に関する著述は近年非常に盛んであり、ほんの一部を挙げるだけでも、『フィールドワークの技法と実際 マイクロエスノグラフィ入門』（一九九九、箕浦康子 ミネルヴァ書房）『心理学の新しいかたち 方法への意識』（二〇〇二、下山晴彦、子安増生編著、誠信書房）『質的研究入門 へ人間の科学のための方法論』



(二〇〇二、ウヴェ・フリック著、春秋社)『質的心理学』(二〇〇四、無藤隆、やまだようこ、南博文、麻生武、サトウタツヤ編、新曜社)『保育実践のフィールド心理学』(二〇〇二、無藤隆、倉持清美編著、北大路書房)など次々と続く。さらにこの動きの中で、二〇〇四年九月には京都大学において「日本質的心理学会」が設立されているのも周知のことである。書店の書棚には、心理学の分野によらず、医療や看護、社会学、文化人類学など様々な分野にわたってフィールド研究、エスノグラフィという方法の衣をまとった背表紙が並ぶ。そして保育や教育の場を「フィールド」とした研究も、また然りである。

「フィールド」という言葉は、保育の「現場」にいた私には、この言葉で切り取ったその時点で入り込むとする世界を、独特な文化をもちそこに入り込む先として対象化してしまうように感じら

れる。翻って本書について見てみると、本書は、大勢の保育者が自分の経験したなりの語りを響かせ合うことで成り立っていて、読者は自ずとその様々な響きの中へ引き入れられてしまう。そこで鳴り響く調べから確かにこの学校で自己の存在感を得て自信をもって生活していくようになる子ども、学校や保育者に温かく受け入れられ生き生きと生活していくようになる子どもが目に見え

しかし不思議なことに、語りの主体にとつては、この本の響きのなかに身を置くことは実際何人かの著者も言っているように何かしつくりこない感覚も呼び覚ますようである。それは、自分自身の語りが現在とのつながりの中で新たに捉え直されることを余儀なくされるからであろう。

生きた現場の語りとは保育者自身に子どもや保育とのたゆまざる応答を迫ってくるということではないかと思われる。

(聖徳大学)